

‘A virginal tongue’の解読

—— ドイッチュランド号の難破

における「英国の難破」——

平 林 美都子

I

ホプキンス (Gerard Manley Hopkins) の「ドイッチュランド号の難破」⁽¹⁾ (“The Wreck of the Deutschland”) は1875年12月7日テムズ川河口で実際におこった難破をもとにして書かれた詩である。この作品を考える上で特に留意すべき点は、ホプキンスが英国国教会からローマカトリックへ改宗したこと(1866年)、さらにその2年後イエズス会に入る直前、「聖職者にはふさわしくない」⁽²⁾ものとしてそれまで書きためた詩を焼き捨て、この詩を書くまでの7年間、詩作を中断していたというホプキンスの個人的事情と、当時、産業革命以後躍進しつづけた英国の資本主義経済が曲がり角にさしかかっていたという歴史的状况の2点である。それは、この2つの状況のいずれが欠けてもこの作品が生まれることはなかったからである。ドイッチュランド号の難破直後、母へあてた手紙の中で、「私はこの難破についてひとつ(詩を)書いてみようと思えます……今までに(新聞で)読んだ他のどんな難破や事故よりも私に深い印象を与えたからです。」⁽³⁾と言っているように、「他のどんな難破や事故」にはなかった「深い印象」が、あえて彼に詩作の筆をとらせたのである。いいかえれば、当時の英国に「聖職者」として身を置く決意をしたホプキンスが「聖職者には

ふさわしくない」詩作の行為にあえて踏みきったのは、両者が両立しうる何かをこの難破の背後に見出し、聖職者たるホブキンズが詩人ホブキンズを正当化しようとしたためだと思われる。彼は、ドイッチュランド号の船上で溺死した一人の尼僧の最期の呼びかけ（‘O.Christ, Christ, come quickly’）⁽⁴⁾の意味を詩の中で解明していくことにより、英国国民の改宗を祈願したのだが、この尼僧の言葉の解明は、実は彼の詩作のアポロギアになっているのでもある。この論文では、ホブキンズの詩作の衝動となったと考えられる尼僧の言葉の果たした役割を調べることにより、いかにして彼が自らの行為を正当化しえたのかを、当時の状況を考慮しつつ探っていきたい。

II

まず、当時の英国の状況をふりかえってみよう。18世紀後半、世界に先駆けた産業革命により、資本主義国家としての英国の地位は飛躍的に伸びた。しかし、この躍進も、1867年の第二次選挙法改正による労働者階級への選挙権拡大と、1873年ごろから20年余り続いた大不況によりかげりを見せ始めた。その結果、従来の地主階級支配という英国の政治経済基盤は失なわれていった。以後英国は、後発のアメリカ、ドイツにその地位を譲り渡して「帝国主義」への道を進むことを余儀なくされるのである。こういう外的状況に加えて、1859年に世に出たダーウィン（Charles Darwin）の『種の起源』（*The Origin of Species*）は今まで絶対的權威のあった聖書を疑うという、人々の精神を根底より揺るがすような衝撃を与えたのであった。このようなよりどころを失なった、精神的危機に直面している国民の姿をホブキンズは深刻に憂えていた。「ドイッチュランド号の難破」の書かれる数年前、「ある意味で、私はコミュニストです。」といってブリッジズ（Robert S. Bridges）を驚かせた手紙には、ホブキンズの嘆きがよく表われている。

…しかし、非常に富んだ英国国民の大部分、それも一番必要な部分が、自分た

ちが築いた豊かさの中で、尊厳、知識、慰め、喜び、希望もない苛酷な生活を送るのは実にひどいことです。人々は何を破壊 (=wreck) しているのか焼やしているのか気にもせず、古い文明や秩序はこわしてしまわなければいけないと公言しているのです。...それ (=the old civilization) は、現在英国にありながら、大部分は難破しつつある船上に築かれているのです (=founded on wrecking)⁽⁵⁾

この時すでにホプキンズが、当時の英国の危機的状況を「難破」という形象でとらえていたことは、ここで二度使われた 'wreck' が明瞭に物語っている。つまり「英国の難破」→「国民の救済」という図式は、「ドイッチュランド号の難破」が書かれる以前に彼の深層意識にすでに内在していたと考えられるのである。

さて、この詩は、1部10連、2部25連の35連よりなり、改宗をもって脱しえたホプキンズ自身の過去の「精神的難破」を扱った1部が、実際の難破について語った2部のいわば下部構造となっている。「神の雷光と鞭」〔“lightning and lashed rod” (st.2)〕をうけ「神のけわしい^{おもて}面を眼の前にして」〔“The frown of his face / Before me” (st.3)〕なおかつ最後には、「心を聖体の御胸に投げやっつて」〔“with a fling of the heart to the heart of the Host.” (st.3)〕神の許に我身をおいた、詩の前半の彼の宗教体験について、例えばコッター (James F. Cotter) はその日時、場所までも明示して、イエズス会での黙想期間中に起こったことだと解釈しているが、詩全体のテーマ、特に2部で扱われる「改宗による救い」というテーマは前半の彼自身の改宗の体験を基盤にしてこそ、はじめてその深遠な意味が生まれてくるのである。この詩は、「難破」という形象でもってホプキンズ自身の改宗体験という個人的問題を、英国国民の改宗という問題へ重ね焼きしたものだといえることができるだろう。

ホプキンズ自身の言葉通り⁽⁷⁾に受けとれば、この詩は 'Bremem stanza' すなわち12連から書きはじめたものらしい。まず12連から17連まで扱われている実際の難破の概略を見ておこう。

——1875年12月4日、ドイツのブレーメンからニューヨークに向けてドイツ
 チュランド号が出航した。乗客の大部分はアメリカへの移民団で、その中にカ
 トリック迫害法⁽⁸⁾によりドイツを追放された5人のフランシスコ会の尼僧たち
 が乗り合わせていた。港を出てまもなく吹雪となり、テムズ河口の浅洲(ケン
 テイッシュ・ノック)に船は座礁した。この沈みゆく船上、狂乱状態になった
 乗客の中で、尼僧たちのうち1人が立ち上がり、次のように叫んだ。「ああ、
 キリストよ、キリストよ、はやく来りたまえ。」⁽⁹⁾——17連までの物語は、当
 時のタイムズの記事をおおむねたどったものである。しかし、18連以降顕著に
 表われる語りの変化—難破の事実からのずれ—はどのように説明したらよいの
 だろうか。

17

They fought with God's cold—
 And they could not and fell to the deck
 (Crushed them) or water (and drowned them) or rolled
 With the sea—romp over the wreck.
 Night roared, with the heart-break hearing a heart-broke rab-
 ble,
 The woman's wailing, the crying of child without check—
 Till a lioness arose breasting the babble,
 A prophetess towered in the tumult, a virginal tongue told.

18

Ah, touched in your bower of bone,
 Are you! turned for an exquisite smart,
 Have you! make words break from me here all alone,
 Do you! ——mother of being in me, heart.
 O unteachably after evil, but uttering truth,
 Why tears! is it? tears; such a melting a madrigal start!

Never-eldering revel and river of youth,

What can it be, this glee? the good you have there of your own?

12連から17連までの客観的な難破の語り、そして18連に突然表れるホプキンズの心の動き、それ以後の彼の主観的な難破の説明——尼僧の言葉の象徴的意味の解明——は、実は聖イグナチウス (St. Ignatius of Loyola) の『靈操』 (*The Spiritual Exercises*) における黙想の方法をまねたものと考えられよう。つまり、三つの部分 (第一前備, 第二前備, 対語) から成り立つ第一週の黙想の中の第一前備「現場想設」が12連から17連までの語りの部分に相当するのである。

現場の想設、すなわち、場所を眼の前に現に見るように想像することである… …眼に見えるものについての観想、もしくは黙想するとき、たとえば、眼に見えるわが主キリストを観想するような場合、現場の想設とは、観想しようとするものがある有形の場所を想像の眼で見ることである⁽¹⁰⁾。

ケンティッシュ・ノックでの難破の様子を想像の目で見るとは、史実の難破から彼自身の内的体験となる象徴的な難破を作り出すことであった。聖イグナチウスは他の箇所でも、五官の活用にも言及し、たとえば「想像の耳でもって」聞くことの益を説いている⁽¹¹⁾。ということは、17連最後の 'a virginal tongue,' つまり尼僧の最後のキリストへの叫びは、「現場想設」のプロセスにおいてホプキンズの想像の耳に、直接響いたのではないか。そしてこの直接の呼びかけが、18連に表われる詩的衝動のきっかけとなっていったのではないだろうか。これ以後、確かに「語られる対象」と「語り手」という距離感はなくなり、尼僧の言葉の象徴的意味を究明するホプキンズの「象徴的難破」へと変質していくからである。この象徴性は、たとえば、船の名の一致 ["O Deutschland, double a desperate name! — / O World wide of its good!" (st.20)], 尼僧の数とキリストの五つの傷の一致 ["Five! the finding and sake / And cipher of suffering Christ." (st.22)], 難破した日の翌日 (12月8日) が聖母マリアの無原罪懐胎

(Immaculate Conception) の祝日にあたること ["What was the feast followed the night / Thou hadst glory of this nun? / Feast of the one woman without stain!" (st.30)] という偶然がさらに、ホプキンズの内体験としての難破の象徴性を深めることになるのである。

「二重に呪われた名」である「ドイッチュランド」は船であると同時に、これを出航させたドイツ国家のこともである。伝統的に船は秩序乱れた国家の象徴であったが、カトリック司祭のホプキンズにとり、ルター以後のプロテスタント国家ドイツは、「呪われた」混乱した国家にみえたのも当然だろう。

13

Into the snows she sweeps,
Hurling the haven behind,
The Deutschland, on Sunday.....

'haven'を'heaven'と読むことにより出航した船が嵐の中に進んでいく様子とドイツが精神的な混乱の中に突入していく姿は重なっていく。ところが、船はプロテスタント国家ドイツの象徴であるばかりでなく、反対に迫害された犠牲者すなわち、ローマカトリックの象徴でもあるのだ。["Rhine refused them, Thames would ruin them" (st.21)] ライン川がドイツを、そしてテムズ川が英国を代表する川であることを考えればドイツを追放され、テムズ河口に難破したということは、両プロテスタント国家が奇しくを連帯した迫害行為の犠牲者として船をとらえることもできる。従って、この船の持つ両極の象徴的役割は、船上のドイツ、プロテスタントの乗客とカトリックの尼僧とがそれぞれ担うことになる。

闇と海がひとつになり、猛り狂う嵐の中で乗客の'babble'と尼僧の'a virginal tongue'は鮮やかな対照をなしている(st.17)。自然界の混乱は人間の言葉の混乱をも引き起こす。互いの意志疎通も神への対話も不可能となったドイッチュランド号の乗客らは、ホプキンズにとってドイツの縮図と映ったのであろう。それに対して、尼僧の「キリストへの呼びかけ」は、この状況で唯一理解できる言葉であり、意志疎通不可能な、'babble'と決定的な違いをなしている。

ここで、この詩における尼僧の「言葉」の重要性を考えてみる必要があるだろう。それは、'babble'と違ってcomprehensibleであることと、認識の段階にとどまらず発話されたものであるという二点が挙げられるが、実はこの二点は、言葉の持つ創造力という点では同一の事実を述べたものである。そもそも言葉の創造力とは、ヨハネ福音書の'Word'⁽¹²⁾の創造性に由来する。そしてこの力により、発話とは概念の実体化なのである。聖イグナチウスも『靈操』の中で対話を重視し、黙想のみに終始せず、最後は神との「対話」をもって締めくくるものとしているが、7年間のイエズス会員としての鍛練が、ホプキンズを「言葉」のこのような価値に目覚めさせたとも考えられるだろう。

ではホプキンズの詩作のきっかけとなった尼僧の「言葉」は彼の「内的難破」においてどんな役割を果たしたのだろうか。

24

She to the black-about air, to the breaker, the thickly

Falling flakes, to the throng that catches and quails

Was calling 'O Christ, Christ, come quickly':

The cross to her she calls Christ to her, christens her wild-worst Best.

その第一は、荒れ狂う自然に向けられた彼女の言葉が、自然界の混乱を秩序あるものへと意義づけたことである。闇に、波に、雪に向けられた彼女の叫び—キリストよ、来たりたまえ—は、彼女の試練('The cross to her')をキリストと呼ぶこと、最悪のものを'Best'と名づけること、つまり混乱たる自然現象に与えた彼女の肯定の答えに他ならない。それは、かつて'lightning and lashed rod' (st.2)に'yes'と答えたホプキンズと等しく、神の力に全身で肯定する態度なのである。

29

Ah! there was a heart right!

There was single eye!

Read the unshapeable shock night

And knew the who and the why;

誰が嵐を創り出したか、そしてその理由を理解した彼女は、嵐の無秩序も神の力による秩序そのものであることを認識する。

第二の彼女の言葉が果たした役割はキリスト受肉の行為である。嵐の象徴的意味の認識はその段階では'conceive'されたものとして心の中にとどまっているにすぎない。'conceive'のもつ精神的レベルの「想像する」という意味と肉体的レベルの「妊娠する」という二重の意味での創造行為は、マリアの懐胎の連想とともに、次の段階の「出産」又は「発話」へと進むことになる。

30

For so conceivèd so to conceive thee is done;

But here was heart—throre, birth of a brain,

Word, that heard and kept thee and uttered thee outright.

心の中における概念としてのキリストは「言葉」を発することにより実在を与えられる。つまり、嵐の象徴的意味の解釈は、尼僧の'conception'—'utterance'というプロセスを通して可能になるのである。

最後は、乗客に向けられた尼僧の言葉が警鐘としての役割を果たしたことである。彼女のキリストへの呼びかけは、彼女自身の信仰宣言であったから救いを得るのは当然だろう ['Dame...Drowned / ...the heaven—haven of the reward' (st. 35)]。

だが、同じ船上で溺死した他の人々はどうなるのか。ホプキンズの関心は「精神的闇」の世界で、「慰めもなく告白もせざるものたち」(st. 31)の死という二重に喪失した人々へ向けられている。しかし、彼らですら救いの道は残されていたのだ。

31

No not uncomforted: lovely—felicitous Providence

Finger of a tender of, O of a feathery delicacy, the breast of the

Maiden could obey so, be a bell to, ring of it, and

Startle the poor sheep back!

至福の摂理に従った尼僧の発する言葉は、「警鐘」として迷える子羊らに救いの道を示すことができるというのだ。そして、神と尼僧の閉ざされた関係は、乗客への開かれた祈りへと変化していく。嵐の背後の神の力 (mastery) を理解して発した彼女の言葉は、実は神の慈悲 (mercy) をも正しく理解しえたのである。

III

「ドイッチェランド号の難破」の難解さをこぼしたブリッジズ⁽¹³⁾に対してホプキンズは、物語の部分から読み始めるように勧めた⁽¹⁴⁾。しかし、実際に彼がこの詩で意図したものは物語なのではなく、ローマカトリックへの改宗を願うオードであった⁽¹⁵⁾。1部と2部の最終2連において、それぞれホプキンズのこの意図が明らかになるが、その祈願の仕方は微妙に違っている。1部はホプキンズの個人的宗教体験からはじまり ('Thou mastering me'), 神に反逆する人々の改宗を願うホプキンズの祈りという、彼と神との個人的関係 (我-おん身)⁽¹⁶⁾に終始している。つまり、閉鎖的な「黙想」の中で、'mastery and mercy'のいずれかにより、闇の世界にいる人々を救い出して欲しいと祈っているのであり、この黙想の中での祈り以外に積極的な行為はしていない。ところが、この閉鎖的な関係は、2部では未改宗の人々を含む開いた関係へと広がっていく。この祈願の違いは、31連で尼僧のキリストへの呼びかけが他の乗客への救いの警鐘になったというホプキンズによる評価が彼自身の祈りにも反映され、そこに新たな価値を見出すことになったのであろう。このことは、たとえば35連に繰り返し表れる'our'という語に開かれた祈りを読みとることができよう。この'our'が国民をさすことはこの連の最初の行ですでに明らかであり、1から1への「我-おん身」の関係は、多から1への「我ら国民-おん身」の関係へと広がっていく。

Let him easter in us, be a dayspring to the dimness of us, be a crimson-
cressted east,

More brightening her, rare-dear Britain, as his reign rolls,

Pride, rose, prince, hero of us, high-priest,

Our hearts'charity's hearth's fire, our thoughts'chivalry's throng's Lord.

ドイツ船の難破は語りの当初より、英国という国家の船の難破を予徴する。ドイッチュランド号に対する責任という形で表われる (sts.21 and 35) 英国を、先にも述べたようにプロテスタント国家としてドイツとの類縁関係からとらえれば、当然のことであろう。W. H. ガードナー (W. H. Gardner) がホプキンズの別の難破詩「ユアリディシイ号の喪失」(“The Loss of the Eurydice”) について述べていることは、「ドイッチュランド号の難破」にそのまま適用できそうである。

この主題を扱うホプキンズの目的は...それ (ユアリディシイ号の難破) をあらゆるキリスト教国の特に英国を脅かす精神的な難破の象徴として用いるためであった⁽¹⁷⁾。

「英国の難破」は、他の乗客に思いをはせた31連に、突然彼の脳裏に浮上してくる。

31

.....but pity of the rest of them!

Heart, go and bleed at a bitterer vein for the

Comfortless unconfessed of them—

ドイッチュランド号の船上でキリストに呼びかけた尼僧の存在は、「精神的な難破の象徴」たるこの難破を「救いの象徴」に変換せしめたのである。こうして尼僧と神の閉鎖的關係が乗客にも開かれた時、ホプキンズの祈りも黙想の世界から飛び出すことになる。祈りがこの詩になったのだ。

では、1部2部にその変化はどのように表われているのだろうか。まず9連の

祈願が、「神」('God, three-numbered form')に向けられている点に注目したい。それに対して、内的難破の体験後のホプキンズは、「慰めのない者たち」へも救いをもたらすキリストの'the uttermost mark' (st.33) を新たに認識する。

33

With a mercy that outrides
 The all of water. an ark
 For the listener; for the lingerer with a love glides
 Lower than death and the dark;
 A vein for the visiting of the past-prayer, pent in prison,
 The-last-breath penitent spirits —the uttermost mark
 Our passion-plunged giant risen,
 The Christ of the Father compassionate, fetched in the storm of his strides.

2部の祈願は、こうしてキリスト向けられ、そしてさらに「英国民の改宗」という具体的な祈りとなり、最終連でいよいよキリストの再臨の祈願へと集約される。

ドイッチェランド号は沈んだ。尼僧と乗客が「天上の港の報い」(st.35)を受けることができたといえども、プロテスタント国家に下された罰というホプキンズの象徴的難破において、船は沈んだ。しかし彼は、英国の船がドイッチェランド号と同じ運命をたどることを黙認するわけにはいかなかったのである。何故なら彼は、船(国家)も乗客(国民)とともに難破から救いたかったからである。ブリッジズに「英国の古い文明は……難破しつつある船上に築かれているのです」と当時の英国民の精神的荒廃ぶりを嘆いた先の手紙にホプキンズの愛国心の一端がうかがえよう。古い文明とは、昔の宗教、知識、法律、芸術という代々受け継がれたものをさす⁽¹⁸⁾。そこには秩序があったはずなのに、今やこれら精神的土台となるべき国家が根底よりくずれようとしていた。国民を救うためには、この沈みゆく船、基盤となるべく英国をも是が非でも救わねばならなかった。そしてそのために、あの尼僧にならい、キリストの到来を呼び

かけねばならなかった。

荒れ狂う海上でキリストに守られた船は、教会の象徴であり、同時に救いの場でもある「天上の港」ではなく、地上のパラダイスを得たいというホプキンズの願い、つまりドイッチェランド号の乗客のように死後の救いではなく、生あるまま精神的闇から彼らを救って欲しいという彼の願いは改宗への具体化せざるをえないのであった。船頭であるキリストに守られた船は、無事港へ着くはずだ。その時、船頭を得た船のイメージは、王たるキリストを得た国でもあるのだ。そもそも船は国の象徴であったのだから。正しい王を得た国家はようやく秩序を回復する。キリストは又光であり、闇から国民を救出するのだ。

W. H. オーデン (W. H. Auden) は、『怒れる海』 (*The Enchafed Flood*) の中で海を「野蛮な無定形と無秩序の状態」だと定義したあと、

国家や社会を船に喩えることは古くからみられる。それが使われるのはつねに社会が危殆に瀕したときにかぎられている。船は港から出てはならないのだ⁽¹⁹⁾。

と国家と船の象徴的關係について述べたが、これはホプキンズの「英国の船」の状況を十分説明してくれるだろう。ホプキンズの脳裏にあった沈みゆく「英国の船」が港に落ちつく時、すなわち港ではなく大地に国家のイメージをもどす時、その秩序回復は確信に近いものとなったともいえるのではないだろうか。地上の楽園がここでは死後の楽園ではないことは 'be a crimson-cresseted east' の 'east' の語にうかがえるだろう。死者たちの国、西方 (west) に対して東 (east) は事のはじまり、生命の誕生を表わすのだから⁽²⁰⁾。

するとこの35連のホプキンズがキリストに呼びかける姿は、尼僧の姿にびったり重なってくる。精神的混乱へと沈みつつある「英国の船」、その船上に「(the old civilization) を破壊することを気にしようとしなさい」人々のざわめき ('babble')。その真只中でキリストに向かって国民の改宗を願うホプキンズは、この詩をもって、彼らへの警鐘となろうとしたのである。それは又、司祭たるホプキンズが彼らに与えた救いの道しるべでもあった。

ホプキンズが、ドイツ船の難破をひとつの災害としてではなく、その背後の象徴的な神意を読みとろうとしたきっかけが、尼僧の言葉であった。たった五つの語 ('O Christ, Christ, come quickly') の解説は、難破の象徴的意味の理解となり、そこに神を全身で肯定する彼の姿があった。表層に表われない「英国の難破」を正しく読みとってこそ、1870年代における英国の中で、最終2連に結集する国民へのホプキンズの逼迫した思いを感じとることができるのである。実にこの詩の存在こそ、聖職者としてのホプキンズが、詩人ホプキンズを肯定しえた証であるといえるのではないだろうか。

—注—

- (1) 詩の引用は、W. H. Gardner and N.H.Mackenzie ed. *The Poems of Gerard Manley Hopkins*, 4ed. (London: Oxford Univ. Press, 1967) による。(以下 Gerard Manley Hopkins を G. M. H. と略記する)。
- (2) *The Correspondence of G. M. H. and Richard W. Dixon*, ed. Claude C. Abbott (London: Oxford Univ. Press, 1955), p.14.
- (3) *Further Letters of G. M. H.: Including His Correspondence with Coventry Patmore*, ed. Claude C. Abbott (London: Oxford Univ. Press, 1956), p.135.
- (4) Norman Weyand S. J. ed. *Immortal Diamond: Studies in G. M. H.* の Appendix に当時のタイムズの記事が集録されている。1875年12月11日のタイムズには “the chief sister, a gaunt woman 6ft. high, calling out loudly and often ‘O Christ, come quickly! ’till the end came.” とある。
- (5) *The Letters of G. M. H. to Robert Bridges*, ed. Claude C. Abbott (1955; rpt. London: Oxford Univ. Press, 1970), pp.27-28.
- (6) James F. Cotter, *Inscape: The Christology and Poetry of G. M. H.* (Pittsburgh: Univ. of Pittsburgh Press, 1972), p.27.
- (7) *The Letters of G. M. H. to Robert Bridges*, p.44.
- (8) The Falck Laws. 1875年5月に施行されたものは聖職者の国外追放を目的としたもの。

- (9) 'O Christ, Christ, come quickly' (st.24)
- (10) 『靈操』(靈操刊行会, エンデルレ書店, 1977), p. 57.
- (11) 『靈操』 p. 92.
- (12) John, I: 1 - 3 .
- (13) *The Letters of G. M. H. to Robert Bridges*, p.42, n. 1.
- (14) *The Letters of G. M. H. to Robert Bridges*, p.46.
- (15) *The Letters of G. M. H. to Robert Bridges*, p.49.
- (16) Martin Buber, *I and Thou* (New York: C Scribner, 1970).
- (17) W. H. Gardner, *G. M. H.: A Study of Idiosyncrasy in Relation to Poetic Tradition* (1949: rpt. London: Oxford Univ. Press, 1966), II p. 263.
- (18) *The Letters of G. M. H. to Robert Bridges*, p.28.
- (19) W. H. Auden, *The Enchafèd Flood or the Romantic Iconography of the Sea* (London: Faber & Faber, 1951), p.19.
- (20) 川崎寿彦,『楽園と庭』(東京:中央公論,1984), pp.3-11.